
三国艶武～乙女乱舞伝～

鴉～夢の運び屋～

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三国艶武〜乙女乱舞伝〜

【Nコード】

N8947M

【作者名】

鴉〜夢の運び屋〜

【あらすじ】

こことは別の違う世界。そこでは、様々な三国志武将が群雄割拠する時代になっていた。そんな中、一人の少女が旅をしていた。その少女は、旅をしながら人としての自分を見つけることになって行く。

注意：登場人物の75%は女性です。「なんだガールズラブか」ト思いの貴方！そんな要素は含まれていなあい！そして、この物語で三国志キャラは全てと言っていいほど女性で構成されています。あとは、そこらへんの石ころが男性だったりするだけです。その点

を踏まえてこの小説をお読みください。

後、正史とはとんでもなく違った人物相関図になっています。

まず一つ目、正史では親子の人間が兄弟として出てきます。その2、正史ではまだいない筈の武将も出てきたりもします。これらを考慮した上で読んで頂けると幸いです。

途中投稿に付いて！

途中投稿の場合、タイトルを途中で止める方式を取っています。タイトルが不完全な場合は未完成です

第巻の武 孫堅、空腹に腹を悩ます

とある世界に、戦の止まない世界があった。そこでは人々が己のため、生きるために戦う者や自分の欲を満たすために人を襲う輩などの様々な人間がいた。

「はあ、お腹・・・減ったなあ・・・」

ため息を吐きながら一人の少女が何処までも続いていそうな道を歩いていた。その道の先に、蕎麦屋が見えて来たが少女はため息をつきながら財布の口を開けて、中身を確認して深いため息をついた。中身が殆んど入っていないかったのだ。それに落胆した少女が蕎麦屋の前を通り過ぎようとした時、扉の向こうから女性の悲鳴が聞こえたので少女は店に飛び込んだ。

「誰だ！お前も殺されたいのか！来るんじゃねえ！」

そこには、料理に使う出刃包丁を恐らく此処の店主であろう男に突き付ける中年オヤジの姿と、怯えきつて物も言えそうにない店主らしき男性、それと此処に来ていた女性客が一人だけ。そんな中で少女は呆れたようにため息を吐くと、ゆっくりと中年オヤジの元に歩み寄って行った。

「来るんじゃねえって言ってるんだろ！来るな！」

自棄になった中年は、気が狂ったように包丁を振り回していた。それでも尚振り回し続けた結果、中年の手から包丁が抜け飛んだ。それは少女に向かって飛んで行ったが、少女の目の前でそれは弾き飛ばされて中年のすぐ横の壁に突き刺さった。

「これでもまだ続けるの？私、今お腹が空いて・・・」

続きを言おうとした少女だが、中年は無言を言わずに店主を解放

してその場を逃げ出してしまった。その逃げ様は、獲物に追われるトムソングゼルの様なものだった。それを見送った少女は、壁に突き刺さったままの包丁を引き抜いて店主に手渡した。店主は一礼するとそれを腰の袋の中に入れて深々と頭を下げた。

「有り難う！本当にありがとう！なんとお礼を言っただけじゃあ……何かお礼をしたかった店主が色々とお礼を言っていると、少女の腹の虫が唸り声のような音を放った。その直後に顔を紅潮させた少女を見た店主は、笑いながら少女の頭を撫でると調理場へと戻って料理を作りだした。

「ほら、出来たよ？ちゃんと食べて欲しいな。」
あつという間に完成した蕎麦を、少女の前に差し出すと少女は小さな声で「でも私お金持ってない……」と呟いたが、店主は「これはお礼のつもりだからいいよ、そんなの！どんどん食べてね？」と言ってくれたのを聞いて少女は蕎麦を凄く勢いで食べ始めた。

「そういえば、お嬢ちゃんは名前なんて言うの？ほら、命の恩人の名前くらい憶えておきたいでしょ？」
蕎麦を出し終わって食器を洗っていた店主が、不意に名前を聞いてみた。すると、口に含んでいた蕎麦を一旦飲み込んでから口を開いた少女は、疑問符を置いてから自己紹介を始めた。

「私の名前？私は孫堅そんけん。字は文台ぶんたい。旅をしているの。内容は……まあ、聞かないで頂戴？それよりも、食べ物を買って助かった。感謝するわ。それにしても、なんでこんな広い道のド真ん中に店を構えたりしてるの？そっちの方が気になっちゃう。」
蕎麦を食べる手をわざわざ止めてまで、店主への自己紹介と質問をした孫堅だが、その内容を聞いた店主は暗い顔をして、まるで嫌な思い出を思い出してしまったように落ち込んでからゆっくりと口を

開いた。

「このところ、この辺りに山賊が出るもんで皆怖がって逃げちゃったのさ。しかもご丁寧なことに、逃げた人の家を翌日に襲って金目の物を盗んだ後は家を燃やして回って・・・だからこの辺りには焼け跡はあっても建物はあまり残って無いんだ・・・って！ごめんごめん。蕎麦が不味くなっちゃうね。こちらへんで切り上げよう。」
暗い顔を無理やり戻した店主は、笑顔を作って孫堅に微笑んだが孫堅は蕎麦を食べることに集中していて孫堅の視線が蕎麦にしか向いていなかった。すると、ここに来ていたもう一人の女性が孫堅に歩み寄って隣の席に座った。

「孫堅殿。私の名は黄蓋^{こうがい}。字は公覆^{こうふう}。この先の麗素^{れいそ}と言う村で花火師をしている者だ。」

特に何かを注文するでもなく水を飲んでいた黄蓋が、蕎麦を食べている孫堅の隣で自己紹介を始めた。その喋り方は中性的で、見た目から大人だと分かる大人っぽさがより一層極まるものだった。そして黄蓋は説明に移った。

「実は、このところの賊の出没が激しくなってきたのだが、麗素では対応のしようが無くなって来たのだ。私たちは協力を欲している。」

「だから、私に協力してほしいと？」

黄蓋のスカウトにも似た言葉を聞いた孫堅だが、少し迷った後にため息をついて「分かったわ・・・」と了承した。そして、蕎麦を食べ終わった孫堅が立ち上がると店主にお礼を言っつて黄蓋と一緒に店を出て行った。ここから、一人の少女の天下統一の物語が始まる。

第貳の武 孫堅、賊を空へ飛ばす

黄蓋と共に麗素への道を道なりに歩いていていた孫堅だったが、風が孫堅の髪を撫でて行く毎に孫堅の髪が靡いて美しい曲線を描いていることに黄蓋は見とれていた。

「どうしたの？黄蓋殿？」

黄蓋のやっている事の意味が分からず頭を捻っていた孫堅だったが、黄蓋は変わらず孫堅に見とれていた。まだ成人の息を越さないように見える孫堅は、黄蓋が見とれるには十分な容姿をしているらしい。すると、唐突に黄蓋がかばんに手をかけた。

「そうだ！孫堅殿！これは私からのプレゼントだ。友人になった記念でも思つて受け取つて欲しい。」

かばんの中から黄蓋が取り出したのは、壊れた銅貨に穴を開けて紐を通しただけのシンプルなネックレスだった。何故こんなものを渡されたのか謎だった孫堅だったが、その辺りは「お守り」だろうと思つて受け取つた。

「ところで、私たちの仲も深まつた。この辺りで「真名」を教えるは貰えないだろうか。」

真名と言つのは、仲の深まつた者同士が名前や字で呼ぶのではなく、自分の本来の名前で呼び合う事らしいが、孫堅はあまり意味が分かっていなかった。分かっていても兄弟の事くらいだ。そんな中でも黄蓋は自分をアピールしたいのか話をグングンと進めていった。

「私の真名は「炎璃」という。よろしく頼む。」

やたらと容易に自分の真名を相手に伝えて良いものなのかと孫堅は思つたが、仕方が無いので自分の真名を思い出そうとして見た。し

かし、思いつくのは兄弟の真名ばかりだった。そんな中で、黄蓋が真名がどんな物なのか待ち遠しく孫堅を見つめて30秒近くが経過した。すると、不意に近くの崖から大きな岩が落ちる音がして漸く孫堅が自分の真名を思い出した。

「思い出した！私の真名は「華恋」と言うんだった。こちらこそ宜しくね？炎璃。」

やっと思い出した孫堅が、手をポンと叩いて人差し指を立てて真名を教えた孫堅は、黄蓋にウィンクして見せた。おふざけのつもりでウィンクだったのだが、黄蓋は何処となく眼を輝かせているように見えた。しかし、道を歩くことも直ぐに止まったのだった。その訳は、山賊と思しき連中に声をかけられたからだ。最初はナンパの類だと思った平和主義者な考え方をした孫堅だったが、この世の乱れ切った在り方を考えてみれば自ずと答えは飛び出してきた。どう考えても賊の襲撃だ。

「おいおい、いかにも金持ってそんな嬢ちゃん達じゃねえか。見逃して欲しかったら！金目の物を俺らに渡すんだなあ。」

約3人で周りを囲んでいた賊たちは、醜く涎を垂らしながら孫堅と黄蓋に手を伸ばそうとしていた。すると、いきなり孫堅に掴みかかろうとした。しかし、その腕が孫堅を掴むことは無かった。

「やれやれ、私はアンタみたいな中年オヤジやガリジジイ、おまけのチビデブガキとかには興味無いのさ。と言うか、興味のある奴の顔が見てみたいよ。どんな醜い姿をしている事やら。フフフツツ。」

軽々と中年の腕をすり抜けた孫堅は、素早く三人の後ろに回った。そして、自分がぶつきたいだけのありつたけのイライラを三人にぶつけた。そしてそれでやっと孫堅が後ろにいと分かった賊たちが振り返ったが、孫堅は間髪いれずに賊を蹴り飛ばした。その脚力は人外と呼べるほどに強く、普通の上段蹴りなのに賊たちは遙か彼方

へと飛ばされていった。

「やれやれ、無駄な体力使っちゃったな・・・炎璃？大丈夫！お見事！」・大丈夫みたいね・・・」

あっさりと賊を飛ばした孫堅が、賊たちを蹴り飛ばした所の穢れを払いながら、黄蓋が無事かを確かめようとした。しかし、その言葉が黄蓋に届く前に黄蓋は孫堅の手を握って跪いていた。そして啞然とした孫堅は、少しめんどくさそうにそれに付き合った。暫く黄蓋が手を放してくれなかったが、数分後に漸く放してくれた。そのおかげでお互いに手が汗でべたべただ。ため息を吐いた孫堅が道を進んでいると、途中に小さな川が見えた。安堵して川の方向に歩いて行った孫堅は、川の水に手を入れて明るい表情になっていた。

「はああ・・・やっぱりこの季節には気持ちが良いわねえ・・・水が冷たく感じられるんだもの！」

今の季節は日本でいえば夏。その暑さは、耐えられない者にとつては地獄のような季節だった。だが、孫堅はそこまで暑さに弱いわけでは無かった。水が一層気持ちよく感じられた。すると、隣では黄蓋が手ですくった水を飲んでた。そこでやっと自分も喉が渴いていると気がついた孫堅も水を飲み始めた。

「・・・ぶはあ！華恋！知っているかな？この辺りには・・・」

何かを孫堅に教えようとしていた黄蓋だったが、同時にあることを思い出して黙り込んでしまった。その様子を「（うわあ、自分で墓穴掘ってそれに墜ちるなんて・・・）」と思っていた孫堅だったが、遠くから多数の男の声が聞こえて全てが分かった。そして、その声が聞こえた方を振り向くと、そこでは約20人前後の盗賊たちが下流の方から歩いてきていた。どうやら孫堅達の姿には気づいていないようだ。しかも武装しているところを見ると、どうやら何処か近くの村を襲いに行くようだ。

「炎璃？出没している賊って言うのはあそこのオツサン達の事？」
黄蓋の肩を叩いて小声で耳打ちした孫堅が、黄蓋に質問すると賊を見た黄蓋が即座に首を縦に振った。太陽がまだ真上を通り過ぎたばかりの所。要は3時前後くらいだろう。そんな時間に激しい運動をしたくは無かった孫堅だったが、問題が早めにケリを付けるチャンスがあるならと、フラフラと体がだるそうに道の方へと歩いて行った。本当にダルい孫堅だが、黄蓋はそうではなくこれも作戦の一つだと思い込んで心の中で応援していた。

「あつつくい・・・」

フラフラしながら賊たちの前に出て行った孫堅を見つけた賊たちが、剣を孫堅に向けて脅すようにじりじりと近づいて行っていた。その間、賊たちは何かを一人一人言っていたが、聞くまでもなく汚いセリフばかりだと見当が付いていた孫堅はその全てを完璧に無視していた。すると、賊の一人が剣で切りかかって来た。

「ああ、もうっ！熱いって言うてるでしょ？！」

イライラを爆発させるように上段蹴りを放って賊を彼方へと吹っ飛ばした孫堅を見た賊が、今度は一斉に襲いかかって来た。しかし、孫堅の前では何もかもが屑になるかのような勢いで吹き飛ばされていった。その間、約3秒。

「華恋！凄い！凄すぎる！」

賊たちを軽くあしらった孫堅をずっと見ていた黄蓋が、またもや孫堅に抱きつこうとした。しかし、それに気づいた孫堅は素早く避けて黄蓋の後ろに周った。

「止めてよ！炎璃い！恥ずかしいじゃんか！」

恥ずかしそうにモジモジしている孫堅を見た黄蓋が、眼を輝かせて

孫堅を見つめていた。そのやり取りは、殆んど女子学生と変わりなかった。それと同時に、黄蓋が年下が好みなのだという事が分かった。

「・・・済まない事をした。それよりも、麗素が見えてきた。私たちも行こう。」

調子を狂わせるように謝った黄蓋は、話を切り上げるように見えてきた麗素の方向を指さした。見た所、それなりに大きな町らしい。そして、孫堅は町に向かって足を進めた。

第貳の武 孫堅、賊を空へ飛ばす（後書き）

これより先、真名が分かっている人物に限っては真名を使用していきますのであしからず。そして、次回予告

麗素に辿り着いた孫堅は、黄蓋の紹介でこの辺りを納めている若い女武将、劉表に会う事になる。しかし、その優柔不断な考えに不信感を抱いた孫堅は唐突に屋敷を飛び出す。果たして、孫堅が向かった先とは。

次回 第3の武 孫堅、虎の如く強き武人 お楽しみに！

第参の武 孫堅、虎の如く強き武人

華恋が村の入り口に辿りつくると、そこには沢山の人々が往来していかかり榮えている町だと一目で分かるほどだった。そこらじゅうから漂ってくる料理の声や、遊びに熱中している子供の叫び声。商人が自分の商品を売り込もうと叫ぶ声やすれ違いざまに聞こえてくる民の話などが行き来していた。

「えらく榮えているものなのね・・・」

少し驚き気味に口をポカンと開けた華恋は、その隣を歩いていった炎璃に話しかけようと横を向いた。すると、そこに炎璃の姿は無く、華恋自身も町の人気の無い所に来てしまっていた。暫くの間、民家の壁にもたれ掛かって炎璃の行きそうな場所を考えていた華恋だったが、人の気配を感じ取って壁から離れて剣に手を掛けた。それだけの殺気が相手から伝わって来たのだ。

「流石に気づかれるか・・・へへへ、嬢ちゃんは大人しく・・・」

しかし、華恋の感じた異様な程にまで強かった殺気は嘘だったかのように、出てきたのは賊らしきむさ苦しいオッサンが一人だけだった。一人だというのにやたら悠長に喋っていたオッサンを軽く蹴り飛ばして空の彼方へと送った華恋は、引き続いて炎璃の行きそうな場所を今度は歩きながら考え始めた。

「華恋もお茶目さんだなあ。まさか迷子になるなんて。」

町の大通りを歩いていた炎璃は、辺りを何度も見渡して華恋を探していた。しかし、幾度となく探しているのに向に見つからなかった。今は手に団子を持って茶菓子店で休息を取っていた。ちなみに炎璃が食べているのは、団子の中にあんこを包んで串で刺し、最後に餡蜜を塗りたくった斬新なデザインの団子だったが、それは

人気があるらしく周りの人々も口にしていた。

「華恋が来ないが団子は上手い・・・華恋！」

団子を口に放り込んでその味を堪能していた炎璃だったが、口の中の団子を飲み込んだ直後に華恋を見つけて椅子から立ち上がった。

華連側から見れば、普通よりも幾分か身長の大きな方である炎璃が立ち上がると、余計に目立っていきそうな気がしてならなかった。その上で、華恋も手を振って近づいて行ったわけだが。

「やっと見つけた・・・団子屋ねえ・・・おつといけない。今は炎璃について行かなきゃ。」

漸く炎璃と再開できた華恋が、炎璃の食べていた団子を見た後その団子屋の立て札を見た。そこには大きな文字で「風雲再起」と書かれていた。店の名前と扱っている食品が違う気がするが、そこはこの店主の趣味なのだろう。見た目からして厳つい顔立ちだ。すると、団子の口直しにお茶を飲んだ炎璃が何かを思い出したようにお茶を一気に飲み干して華恋の腕を掴んで一直線に駆け出した。

「ちよつ！引つ張らないでよ・・・それで？何処行くの？」

最初は戸惑っていた華恋だったが、直ぐに気持ちを変えて冷静になった。そんなこんなで着いた場所は、町の真ん中にそびえたっている5階くらいにはなるだろう大きな建物だった。

「ここはこの麗素を納めている劉表殿がいる場所だ。華恋を紹介してやりたいと思ったのでな。」

それは、きつと炎璃なりの優しさなんだと思った華恋は、炎璃に扉を開けてもらって中に入った。そこは、普通の民家ではあり得ないほどに広い場所になっていた。入り口の横には道に迷う者でも出るのが館内案内版まで設置されていた。

「こつちだ。ついてきて・く・れ・れ・」
従業員の合間を縫って階段に上がった炎璃が華恋を呼ぼうとしたが、その頃には既に華恋が炎璃の背後を歩いていた。それに少々驚いていた炎璃だが、華恋に道案内をしていたのを思い出して階段を上がって行った。

「え？私に客人？ひとりは炎璃ちゃん？通してあげて？」
最上階で椅子に座って暇そうにだれていた劉表だが、炎璃が来たというのを聞いてあっさり通した。そして、華恋を連れだした炎璃が入ってきた。

「劉表殿。我々の問題を解決して下さいさる武人を連れて参った。」
扉を通ったすぐ後に、劉表に華恋を紹介した炎璃は満足そうに笑みを溢していた。それを見て相当華恋が腕が立つと思つた劉表が、テストにと秘密のまま華恋に弓を一瞬で構えた。しかし、それが終わるころには既に華恋は劉表の背後に立って頭を抱えていた。

「お・・・お見事・・・炎璃！今度こそは大丈夫だな！それから、私の事は真名である妖梨と呼ぶように言っただろう？とにかく、孫堅殿だったか。貴方に、一つ頼みたい事があるのだg「断るわ！」
」
急に後ろを取られた妖梨は、驚くことしかできなかった。そして、その気分を紛らわせるために炎璃に視線を向けた。その直後には、何故か炎璃を叱る形になってしまっていたが。とにかく華恋に、だいたい分かり切っているであろう頼みを言おうとした妖梨だったが、その全てを言い終わる前に孫堅ははつきりと断った。

「だってそうじゃないの！？こんなの誰が見ても我がままなだけじゃない。本当に助っ人が欲しいなら、自分自身の足で出向いてお願いすればいい。それをわざわざ友達を使って・・・」

その先を続けようとした華恋だったが、炎璃に物凄い剣幕で「止めるんだ！」と言われて押し黙った。そして今度は華連を制した炎璃が喋る番だった。

「聞いてくれ華恋！君を賊退治に誘ったのは私の独断だ！妖梨は、いつものように賊に頭を悩ませていただけだ。それで私が君に声をかけた。だから、妖梨は何も悪くないのだ。分かってくれ。」
最初の剣幕が嘘だったように、話が終わりに近づくと段々と優しい口調になっていた。だが、やはり妖梨の我がままと言うか優柔不断さが癪に障る華恋は、顔を顰めて部屋を飛び出して行った。

「すまない妖梨！私も彼女のあとを追う！」
炎璃が部屋の扉に手を掛けて妖梨に声を掛けると、直ぐに妖梨が「行って来い！」と言ってくれたので炎璃は何の心配もせず部屋を飛び出して行った。すると、炎璃と入れ違いに一人の商人らしき青年が妖梨の部屋に入った。

「いきなりですいません劉表殿！ですが早急に伝えます！賊が約600の大軍でこちらに向かってきています！」
息も切れ切れに言った商人は、伝え終わると吐血して倒れてしまった。どうやらこいつもその賊に手傷を負わされていたらしい。それに臆した劉表は、吐血した青年を見て腰を抜かしていた。一方その頃、華恋は息一つ乱すことなく麗素の入り口の門に来ていた。そこには誰もいなかったが、それが怪しかったので華恋は足を止めたのだ。来た時には確かに二人の門番が立っていた筈だ。しかし、今は誰の姿も見えない。通行人の姿が見えないのも可笑しかった。

「なんで誰も居ないん・っ！」
門をくぐろうとした華恋の目の前を、槍のようなものが飛んで来たのを感じ取った華恋は反射的に飛び退いた。

「なんなんだ！アンタ達h・グツ！」
しかし、後ろにも人の気配を感じ取った華恋だったのだが、飛び退いたまま姿勢を戻すことが出来なかった為に後ろから鈍器で殴られるような衝撃を受けて意識が持つて行かれた。

「かれ〜ん！どこにいるんだ〜！返事しろ〜！」
町の中心街を探していた炎璃は、大声を出して華恋を呼んでいたが、ふとある事に気づいた。何処も其処も部屋の窓が閉まり切っているのだ。夏場だから寧ろ開け放たれていても可笑しくない筈なのにだ。その違和感を覚えつつも炎璃は華恋の搜索を続けた。

「・・・フツ、そういう事かい・・・そろそろ私の出番かな？」
民家の陰から炎璃を覗いていた誰かがそう呟くと、目的を果たしたように建物の影の中へと消えるように立ち去っていた。それを炎璃は感じる事が出来なかった。

「・・・う・・・うん・・・ハッ！ここは！」
意識を取り戻した華恋がハッと目を覚ますと、そこは暗い洞窟の中になっていた。ふと周りを見渡した華恋は驚いた。声に出すことはしなかったが、そこには、華恋と同じ位の少女たちが他に数人縄で縛られていた。そこでやっと自分も縛られていることと、誰かは分からないが捕まってしまったという事が分かった。さらにやけに体が軽い気がした華恋が自分の体を見みると、服はそのままだったが道具袋や家宝の剣などが消えていた。

「くっ・・・天狼虎剣までも盗られるなんて・・・クソッ！」
自分の家宝までもが盗られていると分かったとたんに悔しさが込み上げた華恋が、悔し紛れに力を入れるとすんなりと縄が切れてしま

った。その事に少しの間唾然とした華恋だったが、途端に妙案を思い付いて他の少女たちの縄を引き千切った。その腕力に少しばかり驚いていた華恋だったが、よく見れば縄は古かったのですぐにこれは老朽化によるものだと分かった。

「さあ！私に付いてきて！皆で脱出するよ？」

華恋が、縄を解いた少女達に号令をかけて華恋達が閉じ込められていた牢屋と呼べないような作りの場所を飛び出した。飛び出した直後に見張りらしき男が物音に気付いて振り向いたが、華恋は男が助けを呼ぶ前に男の首を軽く叩いて気絶させた。それを見た少女たちが、心の中で歡喜に沸いているのが華恋にも伝わっていた。

「ようし！このまま一気に叩くからね！おりやああああああ！」

少女達の応援で土気が高まった華恋は、その勢いを捨てないままに廊下を突っ走って行った。そのスピードに、少女たちは着いて行けなかったが、行く場所は分かっていたのでゆっくりと着いて行った。華恋は、あつという間に広い場所に出た。そこでは、何百とも居るほどの賊共が笑いながら酒を飲み漁っていた。

「私の視界の邪魔よ！ウジ虫がああああ！大将を出せ大将を！」

無防備だった賊たちを電光石火の如く速さで蹴り飛ばして行った華恋は、出る限りの大声で叫んだ。それで火がついたのか、賊たちは性懲りもなくまた襲いかかって来た。それを見事に蹴り飛ばし続けていた華恋の前に、一本の矢が飛んできた。それをギリギリで歯で噛んで受け止めた華恋は、冷や汗を掻きながら飛んできた方向を見てみた。そこには、華恋と余り年が離れていないように思える少年が弓を構えて立っていたが、直ぐに姿を消してしまった。まだまだ襲い来る賊たちで手一杯だった訳でも無いが、華恋は直感的にその少年を追うのを辞めていた。

「これでよし・・・さあ！皆？これで出られる筈よ？行きましょ？」
華恋が少女たちをこの薄暗い洞窟らしきところから出してあげようと後ろを向いたが、そこにいた少女達の顔は恐怖でなのか歪んでいた。その見つめる先を追おうともしなかった華恋が腕を上げて後ろにいた男の顔面を潰してみせると、少女たちの表情が戻った。そして、外に飛び出した華恋達は入り口で息を切らせたように肩で息をしていた。

「あらら・・・皆大丈夫？私がこれから麗素って言う街に貴方達を紹介してあげるわ。そこで、帰路に着くなりそこで暮らすなりの対処をして頂戴？」

それだけ言った華恋が、一步踏み出そうとしたが急に殺気を感じて後ろを振り返った。しかし、そこにいるのは少女達だけで他には誰の姿も無かった。暫くすると、炎璃が茂みの向こうから走ってくるのが見えた。

「やっと見つけたあ・・・心配したんだぞ？・・・華恋、この子たちは？」

漸く足を止めた炎璃が、華恋が助け出した少女たちを見て疑問符を浮かべた。因みに、少女の人数は5人ほどである。すると、華恋は自分の武器を取り忘れたのを思い出して一人で洞窟の中へと突然に走りこんだ。

「え？ちよつ！華恋！・・・しょうがない。皆、これから麗素へと案内するよ。付いてきてくれ。」

華恋が唐突に洞窟の中に飛び込んだのを慌てて見ていた炎璃だったが、少女達の保護を優先させて皆を案内していった。他にも、華恋程の実力があればなんてこと無いという炎璃の妄想も含まれていたのは口が裂けても言えない。そして、洞窟の中に入った華恋は一本道をただひたすらに走っていた。

「全く……どこまで続いているのやら。私も疲れたのかな？」
何処までも続く一本道を見ながら、ため息をついて足を止めた華恋は唐突に壁に向かって石を飛ばした。すると何も無かった場所から一人の青年が頭にこぶを作って倒れた。すると、先程までの一本道だった筈の道が幾つかに分かれていった。

「やっぱり幻術……誰？ 賊にこんな芸当が出来るとはとても思えない。姿を現しなさい？」

華恋が、幻術を見破って正常に戻った洞窟内を見渡した。そのどこにも人影は無かったが華恋は感じていた。人の気配を。それが証明されるかのように壁からぬらりと現れた青年のように見える人影は、醜悪な笑みを浮かべて華恋を見てまた壁に隠れた。

「……逃げられた？ ……さてと、探し物ゝ探し物……つと！
倉庫は此処ね？」

壁に伝わっていた気配が途切れたのを感じた華恋は、直ぐに先程の青年らしき影が退いたと認識して剣の搜索に当たった。歩き始めて数歩も経たないうちに倉庫を見つけた華恋が中に入ると、一番目立つ場所に剣が乱雑に置かれているのを見つけた。執念の怒りに燃えた華恋だったが、その感情は押し殺して華恋は洞窟の外へと走り出した。その途中で何人かの賊が気絶しているのを見つけたが、動く様子も無かったので放つて外の出口へ急いだ。出口を飛び出すと、そこには先ほど見たのと同じ森が広がっていたが、少女たちの姿は思った通りに見えなかった。どうやら炎璃が上手い事連れ出してくれていると確信した華恋は、ほっと胸を撫で下ろして麗素へ続く街道へと足を運んだ。

「私の剣が戻って来たゝっ！ よかったゝ……」
心から安心して剣を擦っていた華恋だったが、気分を著しく害する

ウジ虫がさつそく湧いて出た。いつもの賊だった。顔ぶれこそ違うものの、薄汚れた姿は誰でも同じにしか見えなかった。

「私の前から消え失せろ！」

賊たちが声を発する前に蹴り飛ばした華恋は、少し足を速めて麗素へと向かった。暫く走っていると麗素は見えて来たのだが、様子がおかしかった。そこらじゅうで人の断末魔が聞こえ、鉄と鉄がぶつかり合う音が木霊していた。その様子を見た華恋は、頭に血が上ったように人ごみの中を突撃していった。

「貴様らあああ！私の前で暴れるなあああ！」

眼の前に現れた賊らしき男を蹴り飛ばしながら大声で叫んだ華恋に、全員が腕を止めて華恋を見ていた。そんな事とは知らず、賊らしきものだけを正確に蹴り飛ばして行った華恋は、あつという間に数十人を天へと飛ばしていた。そこまで来てやっと麗素側の自警団などは士気を高め、賊側の人間は憎悪を燃やして狙いを華恋に絞る者ばかりになって行った。そうなれば簡単に、華恋が賊を飛ばしていくだけで全ての事にカタが着いた。

「・・・よしっ！片付け完了！・・・炎璃！無事だったの！」

賊をあつという間に片付けた華恋が、意気込みを飲み込んでいると視界の脇に炎璃の姿が見えたので声を掛けた。少女たちがいない所を見ると、既に行くべき場所に送り届けたと分かった。

「華恋く〜！私が苦戦していたあの人数を打ち破るとは！私は本当に君と出会えて良かったよ〜！」

急遽終止符がうたれた戦闘に、少々慌てていた炎璃だったがすぐに正気に戻って華恋に泣きつくように抱きついた。それを少しばかり煩わしく思っていた華恋だったがそこは真名を教え合ったほどの仲良しという事で流すことが出来た。

「しかし、私の前であんな芸当をするとは……華恋は一体何者なんだ？」

勝利の歓声に浸っていた炎璃だったが、ふと華恋の強さの秘訣に興味を持った。思わせぶりの発言をしてから本人に聞いてみたが、華恋は「気づいたらこうだった。」としか答えられそうになかった。

さらりと諦めた炎璃は、何処からともなく酒を取り出して道端で呑み始めた。

「華恋！貴方も一緒に呑もうじゃないか！君は麗素の英雄だ！乾杯と行こうじゃないか！」

華恋におちよこを手渡した炎璃が、間髪いれずに華恋のおちよこに酒を注いだ。そして、注ぎ終わると皆も一緒に杯を持ち上げて「かんぱーい！」と合唱のようにも聞こえるような呼応で唐突に路上宴会が始まった。宴会が何故催せるかと言うと、実はこの戦闘バトルによるけが人は多少いても死人は一切出ていないのだ。所謂、不殺ノンキルだった。そんなこんなで華恋は住民に引っ張られるようにして宴会の中心になって行った。

第参の武 孫堅、虎の如く強き武人（後書き）

宴会で喜びに浸っていた華恋

そんな彼女の頭の中では姉妹の事が思い浮かばれていた

次回は、そんな姉妹達のお話

次回 第四の武 孫策、明るい心で彼方を照らす！

お楽しみに！

第四の武 孫策、目覚めは元気の源だ！

賊たちから受けた襲撃を、いとも簡単に片付けた華恋は宴会が催されて身を引こうとしたが、隣にいた炎璃に腕を掴まれてゆく手を遮られてそのまま炎璃に引きずられるようにして宴会から抜け出せなくなっていた。

「・・・はあ・・・やっとひと段落だあ・・・私も過ぎた事しちやつたかな・・・」

宴会広場から、こっそりと抜け出して街の外れにある小さな丘の上に寝そべって休憩していた華恋は、ふと家族の事を思い出していた。華恋の家族構成は特殊で、まずは両親が居ない。その理由は他の農民とあまり変わりなく賊に殺されたという単純明快なことだったが、次に男子が一人もいないことが挙げられた。まずは長女の華恋。彼女は18才だ。その妹が次女の凛花だ。因みに彼女は15才。その次が三女の魔可まか。この子は12才。その次が四女の風ふうだ。この子に至るとまだ9才だ。このように、誰一人として二十歳を超えていなかったのだ。そんな状態で何故生活出来たのか。それは、華恋と魔可による巧みな連係プレーによって生活を全面的にカバーしていたからだ。しかし、華連が居ないこの状況で魔可が何処まで出来ているか心配になるのは姉として至極当然のことだった。

「凛花達・・・今頃どうしてるかな・・・」

物思いにふけていた華恋だったが、炎璃が華恋の姿を見つけるとすぐさまに華恋を逃げられないようにされてそのまま疲れも取れていないうちに宴会場へと引き戻されていった。それから宴会は夜が明けるまで続き、やっと解放された華恋の顔はぐったりとしていた。そして、漸く宴会が終わった華恋は、とりあえず劉表の屋敷で一眠りすることにした。一方その頃、華恋が気にしていた凛花達は朝の

日差しで眼を覚ました。此処は山の山腹の途中にある小屋だ。ここで凜花達は寝泊りをしているのだ。

「・・・ふああっ！もう朝かぁ・・・もう少し寝たい気分・・・」

いち早く目覚めたこの少女、魔可は眠たそうな顔をしてはいたが起きようとはしていた。しかし、やはり睡魔には勝てないのかまたもや眼を閉じて眠り始めた。その寝像は驚くほど大人しく、隣で眠っている姉とは大違いだった。当の姉である凜花ははしたない格好で布団を退けており、寝間着からドカンと腹が飛び出していた。このままでは風邪を引きかねないだろう。

「うう・・・んんっ・・・はにゃ！お姉ちゃん！」

布団を食みながら眠っていた孫家の末っ子、風が異変に気付いて唸りつつも目を覚ますとそこには凜花の足が堂々と乗せられており、それを見て苦しさの正体が分かった風は驚きつつも凜花を呼んだ。しかし、凜花は目を覚まさずにひたすらだらしのない格好で寝息を立てているだけだった。

「風？起きちゃった？ごめんね？」

眠り切る前に風の驚いた声を聞いてしまった魔可が、何故か反射的に謝っていた。しかし、風は全くと言っていいほどに怒ったりはしていないので、体を起こそうとしていた魔可の頭を撫でて笑顔を見せていた。すると、やっと目を覚ました凜花が、右手だけ挙げてなにやらモゾモゾ言っていた。どんな夢を見ていたかはだいたい予想がつく。どうせ何かと勝負して勝った夢だろう。分かりやすく満足そうな顔で起き上がっていた。

「んん・・・おっ！みんな、おはよっ！さあて・・・今日も明るいくか〜！」

目覚めて直ぐに元気になった凜花は、勢いよく腕をブンブンと振り

回して気合を入れていた。その隣では、まだ眠そうな顔のままの自分の妹達がいる。そんな時、元気の有り余る長女のすることと言えば一つ。元気づけてやることだ。

「どうしたの？皆して元気ないよ？私は元気だけどね。」

妹達を一通り見回した凜花は魔可から順番に頭を撫でてそれとなく元気づけようとした。すると、それが健気に思えた魔可は凜花の頭を撫でかえして少し笑った。それはほんの微かな笑顔だったが、凜花を元気づけるには十分だった。

「それじゃ・・・私はこれから朝食作るから・・・待つてて・・・」

お互いの元気づけも終わったところで、魔可が立ち上がって調理場へと足を向けた。調理場と言っても炊飯窯が一台とその隣に妖術式のコンロが一台。後はまな板を置く為のスペースがある程度のごく普通のキッチンだった。

「それじゃ、点火して・・・手っ取り早く目玉焼きでも作るかな・・・」
コンロに火を入れて自分特製のフライパンをそこに置いた魔可は、簡易式の蔵の中にあつた卵を数個取り出して割った後、フライパンの上に落とした。本当に手っ取り早く出来あがつた目玉焼き三つを素早く皿に乗せた魔可はそのまま姉と妹が待つ場所へと向かった。

「・・・おっ？来た来たっ！もうお腹ペコペコだよ・・・」

魔可が料理を運んで来たのを見つけた凜花は、その皿の中身を見て目を輝かせていた。その目玉焼きには、塩と砂糖がふんだんに使われていたのだ。普通に考えれば砂糖は有り得ないと思うのだが、これを凜花は満足気な表情で喰らい付いていた。

「もう・・・お姉ちゃん。もう少しゆっくり食べなよ・・・」

目玉焼きにがつつく凜花の横で同じものを食べていた風は、余程眠

いのか目が細くなつてたまに首が揺れていた。それでも美味しい目玉焼きを食べていたのだが、暫くして風の箆が空を掴むようになっていたのを見た魔可が気付いて風を起こしていた。どうやら本格的に眠っていたらしい。

「さて・・・ご飯も食べたし・・・私はちよつくら遊んでくるねえ？
それじゃ！」

真つ先に朝食を食べ終えた凜花が、素早く服を着替えて何も持たずに外へ飛び出して行った。それを朝食を食べながら見送っていた魔可たちは、凜花の姿が見えなくなると直ぐに箆を動かし始めた。そして彼女達の平穩な一日は始まつて行ったのだった。

第五の武 黄蓋、孫堅に付いて行く

華恋が賊を倒し、宴会も終わりを迎えてもう普段の街の活気に戻っていたその頃、炎璃は妖梨の部屋で話をしていた。その内容は、この麗素を離れて華恋に付いて行くというものだった。

「妖梨！この通りだ！頼む。私を華恋・・・いや、孫堅殿と共に旅に行かせてくれ。」

頑なに炎璃の旅立ちを拒む妖梨に、炎璃は土下座までして頼みこんでいた。一方の妖梨は、炎璃の見えない位置になるように顔を向けて、人知れずに友達との別れを惜しむように泣いていた。本当は一緒に居たい妖梨だが、友達を支配していたとあってはそれはもう友達とは呼べない存在になってしまう。

「嫌だ嫌だ！・・・炎璃、私の事が嫌いになったのか？」

頑なに拒んだ妖梨は、ようやく決心して炎璃と真正面から向き合った。その顔はやはり涙で濡れており、そこでやっと炎璃は妖梨が自分とどれほどまで一緒に居たいか分かった気がした。

「そんなこと無い！私は・・・私は・・・妖梨の大切な友達だ！・・・そうだろう？妖梨？」

泣き崩れている妖梨を見た炎璃は、土下座なんてやめて直ぐに妖梨を抱きしめてあげた。それでやっと涙の止まった妖梨は、涙が収まっているうちに炎璃を抱きしめて、二人で泣きじゃくり合った。

「・・・何？この茶番劇。」

部屋の隅で様子を一から十まで見ていた華恋の感想は、ただそれだけだった。それから暫くして、互いに落ち着いたのか抱き合うのを止めた二人はお互いを見合って一つ頷いた。

「私は決めたぞ！炎璃！貴方の旅の供、許可します。．．．ただし、無事に帰ってくるのですよ？」

いきなり口調を変えるように炎璃に告げた妖梨は、それだけ言っで見晴らしのいい窓側を向いてしまった。そして立ち上がった炎璃は、決意を固めたように澄んだ瞳のまま華恋の腕を掴んで劉表邸を出た。

「あれで良かったの？．．．炎璃？」

引っぱり出されて暫くして、炎璃の真意を確かめようとした華恋だったが炎璃の無反応さに苛立ちを覚えつつも彼女の顔を覗き見た。その時の炎璃の表情は、涙と鼻水で少し汚くなっていた。それを見かねた華恋は、静かに腰の袋から小さなハンカチの様な物を取り出して炎璃の顔を拭いて行った。

「．．．言葉にも出来ないほどの苦渋の決断だったのね．．．今は思いつ切り泣きなさい。」

泣きつ放しの炎璃を、劉表邸から出て直ぐの路地裏に誘導した華恋は、すぐさま炎璃に耳元で呟いて優しく抱き寄せた。それに釣られるようにして抱きついた炎璃だが、次第に華恋に抱きつく力が強まって行っていた。それに暫くしてから気づいた華恋だったが、『時すでにお寿司』（遅し！）とは良く言ったものだ。その頃には既に炎璃の目には欲望が渦を巻いており、半分身を預けるような体制になっていた華恋は易々と炎璃に押し倒された。

「フフフンツ！孫堅殿！いや、華恋！貴方はミスを犯した！これでは「好きにしてえ！」と言っているような物だぞ？フフフ．．．」
少々．．．否！ぶつ壊れた発言をした炎璃は、その器用な手先で素早く華恋の服に手を掛けた。しかし、それを引つ張って服を脱がすこととは叶わなかった。反射神経では華恋が何枚も上手だったので、勢

いを付けさえすれば炎璃程のテクニシャンでも容易に引き剥がす事が出来た。しかし、加減をし忘れた華恋は今になって後悔している。その光景とは、路地裏に入ったので民に姿は見られずに済んだものの、華恋が炎璃を投げ飛ばした衝撃に釣られるようにして民間人が多数集まって来ていた。これはマズイと反射的に感じ取った華恋は、暴走から気を失っている炎璃を壁から引き剥がしてその場を離れた。

「・・・はあ、はあ・・・なんて事をするんだ！炎璃！」

人の気配の全くしない、祭りの時に華恋が好んで座っていた小高い丘の上で、華恋は炎璃を引き剥がすときに引つ張られて少し千切れ飛んだ服のボタンを直しつつ炎璃に檄を飛ばしていた。正気に戻った炎璃は、まるで老いぼれた爺さんが若い娘を見て鼻血を出すように、華恋の服から飛び出して下着だけになっている豊満とも貧相とも呼び難い微妙な胸を見て興奮のあまりに鼻血を噴出していた。華恋の顔が走ったことと恥ずかしさから赤くなっていて、それは炎璃を興奮させるには十分すぎた。

「華恋・・・私は・・・私はあ・・・」

心が不安定な証拠のように瞳孔が開いたままの状態ですら華恋へと一歩づつ近づいて行った炎璃だが、そんな事を許すほど、華恋も淫乱ではない。すぐさま炎璃の顔を数度軽く叩いて正気を戻させた。

「・・・はっ！華恋・・・？私は一体・・・確か、妖梨と分かれて君と旅に出ることを誓って・・・」

記憶の整理をしていた炎璃は、癖なのか頭を掻きながら考え込んだ。全てを思い出すまでに、実に一分ほど掛かっている。それでも、暴走していた間の記憶はすっぽりと抜け落ちていた。華恋が、自分かもしれないと思いがままになっていったとしたら、いかに恐ろしい事になっていたかを想像して寒気が走っていたのを余所に、炎璃は自分の考えを全て過ちという一言で自己完結させていた。そして、一

っ大きく深呼吸した後、華恋の方を向いた。

「そうだった！華恋！次は何処へと向かうのだ？私もその位は知っておきたいのだが・・・」

目を輝かせながら華恋へ聞いて答えを待っていた炎璃だったが、華恋は少し首を傾げて考えるだけでチヨチヨイと方向だけ決めているようにしか見えないように山のある方向を指さした。十中八九適当だろう。

「私は明確な目的など無いまま旅をしているのだけど・・・それでも私に・・・ちよっ！くつつかないで！」

考えつつも炎璃に目的の有無だけでも伝えようとした華恋だが、予想以上に芳しくない答えを炎璃は受け付けてくれず、聞く耳も持たないように華恋の腕に抱きついてくつつく様にして先程華恋が指さした方向へ歩いて行った。その時の炎璃の表情は、とても満足気だったと華恋は気付きもしなかったという。

第禄の武 孫策、街での戦い。そして友との再開

華恋と炎璃が麗素を飛び出して本格的な旅に出ている頃、凜花は麓の街をウロウロして街の情景を眺めていた。

「やっぱり・・・何も起きてくれないと退屈・・・」

人ごみを出て、少し広い広場に出るとそこに座り込んで空を見上げていた凜花だったが、そんな願いに限って優先的になえられる事がある。凜花が人ごみの奥を見ると、明らかに怪しそうな武装した男が数人の束になってウロウロしていた。直感的に危険視した凜花は、茂みの中から様子を伺っていた。すると、その予想は的中した。その眼をつけていた男達が一つのガラス細工店の前で立ち止まったかと思うと、駆け抜けるように店内に入ってしまった。その直後には女性の悲鳴。

「あいつら・・・」

これはビンゴと思った凜花が急いで店に入ると、男たちは一人が人質を取り、一人が見張り、一人がガラス細工を袋に投げ入れていた。止めようとした凜花だったが、そんな事をするまでもなく動いた人間がいた。凜花の後ろから飛び出したのは凜花と同じ位の少女。その少女がまずは人質を取っていた男の親指に手刀を喰らわせて手を離させ、次にガラス細工を盗んでいた男の足元を挫いて転げさせ、そのまま見張りから応援を呼ぼうとしていた男へ盗みの男を投げつけた。ものの数秒で全てに片が付いた凜花は、改めてその少女を見た。その人物は、凜花も良く知る人物だった。

「美鈴！久し振りっ！」

凜花が美鈴と呼んだ少女は、体にへばり付いていた埃を払い落していた。払い終えた頃に凜花が呼んでいる事に気が付いた彼女は、久

し振りに聞いた声に笑顔を作って振り向いた。その顔は、先程の戦闘力からは想像もできないほどに少女らしい可愛い笑顔だった。

「凜花っ！こっちこそ！久し振りね！でも、一年前以来だったかしら？」

美鈴が凜花の手を強く握って、お互いに抱き合った。一年間もの間、会えなかった幼馴染と出会えたのだ。相当に嬉しいに違いない。表情もお互いに明るいのは言うまでもない。

「しっかし、美鈴も強くなっただわね。前はそれほどだったのに・・・」素直に美鈴を褒めた凜花だったが、美鈴は「そんなこと無いよ。君が強すぎるの。」と、自嘲気味に微笑んでいた。暫くして自警団がやって来て盗賊を縄に締めた後に美鈴達に一礼してから戻って行った。

「それにしても、旅の途中で街に着いた早々、事件に巻き込まれるなんてね。此処まで来ると何か憑いてるような気もしてきたよ。ハア〜。」

先程まで事件が起きていたガラス細工店を見て、ため息を吐きながら自分の運命に改めて実感した美鈴は、頭に手をやって呆れることしか出来ないでいた。すると、何処か近くのお店で買って来たのか凜花が竹の水筒を美鈴に渡していた。近くのベンチに座り込んでから水筒の蓋を開けて中身を上品な手つきで飲んでいた美鈴に対して豪快に蓋を取って中身を一気に飲み干していた凜花。この二人がこう並ぶと、凜花の下品さと大雑把さが際立っているように見えた。

「・・・ぶはあ！やっぱりおいしい！・・・ところで、さつき旅してるとか言ってたけど・・・なんで？」

水筒の中身を本当に飲み干してしまった凜花は、先程美鈴が言っていた旅というキーワードが頭に残っていたので聞いてみた。すると、

美鈴は「なんだ？知らないのか？」とだけ言っつて水筒から口を離した。そして、躊躇いつつも説明を始めた。

「面倒の嫌いな貴方の為に要約すると、孫堅殿・華恋さん程の武勇を持つている者を武将として我が軍に招き入れたいと思っっている軍勢が、今現在で10以上あるらしい。私は、それを伝えつつ華恋さんに弟子入りしたいと思っっているんだ。」

宣言したとおりに要約して説明した美鈴だったが、落ち込むと予想していた凜花の顔を想像していたので顔を暗くしていたが、凜花が何故かガツポーズを作っつて心の中でメラメラと燃えている所を見て予想が外れて目を点にした状態で凜花を見ることが出来ないほどに驚いていた。

「姉さんが武将・・・燃えて来たじゃん。姉さんと一緒にいれば強い奴と戦える・・・」

ガツポーズのまま考え事をしていた凜花は、その先の事を想像して不気味な笑顔を作っつていた。暫くしてやっとポーズを止めた凜花は、衝撃的な発言をすることとなる。

「よし！私も旅に出る！もちろん、妹達も一緒に！」

きつと最初は軽い気持ちだったのだろう。それも自分の勝手な物だしかし、そこには姉に会いたいという思いと強い相手と戦いたいという衝動の二つがあった。危険とは分かつていても、妹達を連れて行くことも配慮していた。配慮とは呼べないかもしれないが。

「・・・冗談では無いんだな？凜花？」

一瞬、数少ない凜花の冗談をカウントしそうになった美鈴だが、凜花の意志の強さを感じ取っつて冗談ではない事を悟っつて聞いた。もちろん帰っつて来たのは、凜花の元氣そうな返事だった。そして、美鈴を自宅まで招いた凜花は妹達にその事を説明した。もちろん最初は

反対していた二人だったが、凜花の頑固な性格に負けて数十分した後、後にはやっと折れてついて行く事に了承した。

「お姉ちゃん。本当に行くの？」

ついついしぶとく聞いてしまった魔可だが、凜花は決意を固めて崩す事などはしなかった。魔可に「うん。」とだけ返事を返すと、そのまま見支度に戻って行った。暫くしてリビングに集まった姉妹の荷物は大きさも柄もそれぞれだった。

「あれ？お姉ちゃん？荷物は？」

凜花が鞆らしきものを持たずに手提げ一つだけだった事に疑問を持った風だったが、凜花は「無問題！」とだけ言って中身を公開した。その中には、必要最低限の着替えと必需品のみが入っていた。非常にきれいに整頓されている。

「それなのに・・・魔可？アンタの荷物はどうなってるの？」

自分の手提げを戻して全員の荷物を見渡した凜花だが、魔可の荷物の多さにため息が漏れていた。件の荷物だが、魔可の身長と同じ位の大きなカバンを利用してパンパンに膨れ上がっていた。中身を覗こうとした凜花だったが、魔可が物凄く嫌がった為に止めた。そして、自宅に別れを告げる様にして凜花達の旅は唐突に始まった。

第4の武 孫権、恐怖を覚える

凜花達が旅を始めて数刻も立たない頃、背後に何かの影をいち早く感じた魔可は、皆にも気付かれない様に手の中であるものを作っていた。

「・・・後ろに誰かいるね・・・」

やっと後ろの不穏にも感じられる気配を感じ取った風が、怯えた眼で魔可の腕にしがみついていた。魔可はそれも気にせず、後ろの気配にばかり気を向けていた。それがいけなかったのか、前方の注意がそれていた。

「なんなの？さつきから・・・アイタツ！」

後ろばかり気にしていた凜花が、面倒なので後ろを向いて歩いていった。しかし、前方がまったくもって疎かになっていた凜花は木にぶつかって頭を打った。それについては自業自得だと承知していた凜花だが、その隙を突いてなのか数人の盗賊らしき男達が茂みから飛び出してきた。どいつもこいつもそれなりに武装している。剣を構えている奴もいれば鎖鎌を振り回している奴もいる。

「通してくれなさそうだね・・・いつちょやるか！」

賊たちが自分個人の思いの限りを吐き散らしている最中、魔可と風を守るように挟み込んで賊たちと向き合った凜花と美鈴は、お互いを肩越しに見つめ合ってからそれぞれに走り出した。凜花は右の賊たちを、美鈴は左の賊たちを片付けて行った。と言っても、二人の自慢のテクニクで蹴り飛ばしているだけだ。

「風・・・怖くないからね・・・？」

手を震えさせながらも風の肩をしっかりと握り、風を安心させよう

としていた魔可だったがその安心は直ぐに断たれた。

「て、てめえら！今すぐ武器を捨てる！」

凜花が取り逃がした最後の一人が自暴自棄になって、魔可が必死に守ろうとしていた風を引き剥がして人質に取った。しかし、動揺していた隙だらけだと丸見えだった凜花達にはそんな策など通用しなかった。素早く風を解放してやろうと思っていた凜花だったが、読みを外してしまった。刀で風を押さえつけていた賊が、自棄を起こして風を切った。その時、傍にいた魔可には風の返り血が雨の様に掛かった。

「・・・あ・・・ああ・・・」

風の返り血を見て、言葉も出せなくなってしまうた魔可はそのまま茫然としているしかなかった。その間に、間を詰めた凜花は賊の顔を潰すつもりで木の棒の先を顔にめり込ませた。数十？吹き飛ばされて動けなくなった賊などは無視して風の傷口を診ていた美鈴は、嫌そうな顔をする。

「クツ・・・奴の刃が風ちゃんの肺にまで達している。このままでは・・・」

切り傷を見てあっという間に傷口の度合いを調べた美鈴が廻りを見渡した。しかし、当然の事だがこの辺りは人の民家など見当たらないどころか小ざつぱりとした森と言ったほうが適切な場所だったのだ。このままここにいては危なかった。小ざつぱりしているとはいえ此処は森。獰猛な獣たちも多く生息している事だろう。血の臭いを嗅ぎつけた獣たちがする事はひとつ。狩りと言う名のワンサイドゲームだ。

「とにかく、風ちゃんを何処か休ませられそうな場所へ・・・わ・・・私が連れて行きます！」・・・何？！」

もう虫の息になりかけている風を抱えた美鈴は、そのまま来た道を走って進もうとした。しかし、走り出した直後に茂みから少女の声が聞こえて美鈴は立ち止った。その間にも風の血は地面へと着実に流れ落ちていた。そして、魔可はただただ自分の妹から流れ出ている血に怯えていた。今となつては目の視点も合っていない状態だ。怯え竦んでいる魔可を背負つた凜花はそのまま美鈴と一緒に、茂みから出て来た一人の少女に付いて行くことにした。罨である可能性も捨てきれなかったが、とにかく今は少しでも風の助かる道が見えている方へ駆けていかなければならなかった。

「こっ……こっです！」

少女が、唐突に足を止めて目の前を指さした。そこには、雑木林の中にひっそりと建っている館が見えた。高さは無いものの雑木林を生かした広い館になっているようで、大きな門も聳^{そび}えていた。

「はやく！医務室へ！」

呼吸も荒れ気味になって慌てていた美鈴が、もう呼吸の声も聞こえそうにないほど弱っている風を抱えて気が気で無くなっていた。

「こっちです！」

少女が、広い館の中の離れへと誘導していた。どうやらそこが治療室らしい。急いで駆け込んだ美鈴を追うような形で治療室へと駆け込んだ少女は、そのまま手術の準備に入る為扉を閉じた。外で待つことになった凜花と魔可は、ただただ祈ることしか出来なかった。

「風が……風が……」

自分の手を見て恐怖に体を震わせていた魔可だが、それをただただ見守ることしかできなかった凜花に出来た事は、頭を撫でてやる事ただ一つだった。それでも落ち着いてきたのか、魔可はゆっくりと眠るように気絶した。体を恐怖からなのか寒そうに震わせていたが、

凜花が抱擁してやるとそれは収まった。暫くは沈黙の中に放り込まれていた二人だったが、治療室の中では風が必死に踏ん張り、美鈴とあの少女が必死に助けようとしているのを思い浮かべながら、凜花は壁にもたれるように眠った。数刻後になつて部屋から出て来た二人が見た物は、凜花と魔可が寄り添いあつて静かに寝息を立てている姿だった。手術は成功していたのだが、伝えようとして外に出て来た二人が、気が付けば眠ってしまったている二人にその事を教えるのは少し後になった。

「・・・本当！よかつたあ・・・」

少ししてからゆっくりと目を覚まして、美鈴から風の容体を知らされた凜花は胸をなでおろして大きく深呼吸しながら安心していた。隣では魔可も眠っていたが、伝えるのは後にした凜花は風の様子を見に行こうと扉に手を掛けた。その時、部屋の中から声が聞こえたので慌てて扉を開けるとそこには、傷も塞がっていないのに無理に起き上がるうとする風がいた。

「風！止めて！」

走って風の元まで来た凜花は素早く、しかし優しく風を台に寝かせた。かなり辛かつたらしく、表情に余裕の類の物が全然見えなかった。

「・・・お姉ちゃん・・・わた・・・し・・・」

喋るどころか呼吸すら辛いほどに疲労している筈の風が、必死に凜花に呼びかけた。しかし、苦しいのは事実なので言葉は続かず風はまたもや気を失った。その様子を見ていた凜花には、罪悪感と虚無感が渦巻いていた。どうしてあの時全て片付けられなかったのか、自分にもっと力があればと心の中で嘆いていた。大声で叫びたくもなった凜花だが、握りこぶしを作って部屋を飛び出して壁を殴って悔しがっていた。そのまま、少女はこの館で宿を取って行くことを

勧めてくれたので世話になる事にした凜花達は、それぞれに手荷物を指定された部屋に降ろして行くのだった。

第捌の武 劉備、尚香にときめく

謎の少女が凜花達の前に現れて、自分の館に案内。そのまま風を美鈴と一緒に見事に治療して見せた後、凜花達は部屋で寛いでいた所を少女に呼び出されると何故か少し離れた大きな部屋へと案内された。その間、違和感を覚えていた凜花だが館の広さにその違和感も消し飛んでいた。

「どうぞ、中へ。」

少女が凜花達を部屋の中に通して戸を閉めると、部屋の中央付近に座布団を四枚敷いてその内の一枚に少女が座った。それに合わせるように座布団に座った凜花達は、それぞれ座り方に個性が出ていた。まずは美鈴。正座の形も綺麗に整っており、手の位置も正確。無駄のない正座だ。魔可は、先程の恐怖が取れ切っていないのか正座のしかたはそこそこ出来てはいるが廻りをしょっちゅうキョロキョロと見回したり手をモジモジとしたりしていた。凜花は正座などせずに楽に胡坐を掻いていた。

「まずは・・・そうですね。私の名前からですね。私は劉備。字は玄德と言います。まだ幼いですが、一応は漢王朝の末裔です。まあ、信じてもらおうとは思っておりません。っと、話が逸れていますね。私はあの時、山菜を積んでいました。そして、山菜も積み終わって帰ろうとした所で何者かの怒号が聞こえて来たので駆けつけ、その先で血みどろになった風ちゃんを抱えて何処かへ行こうとしている美鈴さんを見つけたのです。あっ、風ちゃん・・・孫尚香さんの真名は美鈴さん・・・周輪さんに聞かせてもらいました。貴女が凜花さん。貴女が魔可さんですね。」

なんだか集中力と主語に欠けた説明をした劉備は、風と美鈴の名を出した時に凜花達が疑ってはいけないと思って先に説明した。しか

し、話が終わるまでその疑いに気づきすらしなかった凜花達はただただ話を聞くことしかできなかった。暫くすると唐突に劉備が立ちあがり、部屋を出て行ってしまった。暫く待っていた凜花だが、急に劉備の真名が気になって美鈴に、本人も居ないのにコソつと聞いてみた。しかし、几帳面な性格の美鈴が返す答えは決まっていた。「駄目に決まっている！」と。

「・・・風、大丈夫かな・・・」
俯きながら畳の目でも数えているように見えてしまう魔可が、唐突にボソツと呟いた。しかし、それを聞き逃すような馬鹿である筈もない凜花と美鈴は、魔可を励まそうと二人して同時に話しかけていた。それでも元気は出る物のようで、魔可の目には恐怖が消えつつあった。それを見て安心した凜花と美鈴は、元いた位置に座ってジツとしていた。

「みなさん、山菜揚げを持ってきました。これを食べて力を出して下さい。それと・・・ほら、風ちゃん。」
暫くして、やっと戻って来て戸を開けた劉備の手には幾つもの山菜料理（主に揚げ物）があった。それを並べていた劉備は、唐突に戸の向こうから風を呼んだ。起き上がれるほどに回復していたらしく、風は包帯で胴をぐるっと巻かれた状態で松葉杖をつきながら歩いていた。なんだか恥ずかしい感じの顔をしている。無理もない。この部屋には確かに女性しかいないが、周りは皆スタイルの良い者ばかり（凜花：体もスリムで胸もそれなりに大きい。美鈴：大人っぽさを感じさせる抜群のスタイルの良さ。魔可：まだ発育途中にも関わらず胸はそれなりに大きい。劉備：自分と年は変わらない筈なのに自分よりもスタイルが全体的に良い。）だったので、少し気落ちした感じなのだ。

「うう・・・高麗ちゃん・・・さすがに裸に包帯は恥ずかしいよお。」

「
包帯でグルグル巻きにされているとはいえ、やはり風も幼いながら少女であることに変わり無く、スタイルの乏しい体を隠すように縮こまりながら席に着いた。体が痛いのか顔をしかめていたが、それも直ぐに取り払われた。風が口にした高麗というのは劉備の真名らしい。真名を知らない人の前で真名を使うのは如何なものかとも思った美鈴だったが、風を助けた恩人にそんな事を注意するほど美鈴は馬鹿ではなかった。」

「・・・!?この山菜・・・筑紫ですね。この辺りの山は乾燥しているから生えてないと思っていました。が・・・」
早速山菜揚げを口に運んだ美鈴は、こんな時でも分析を發揮して味からそれが何であるかを推測して見せた。それは見事に的中しているらしく、高麗は目を輝かせて美鈴を見つめていた。

「ところで・・・本当によかったのかい?私たちを此処に泊めてさ?」
夕御飯を御馳走になりながらも、高麗の事も考えた凜花が高麗に聞いてみた。答えはだいたいの予想していたが、それと寸分違わない返事が返つて来た。

「ハハツ・・・いいんです。困っている人は助けたくなる性質なので。」
御飯を食べていた高麗は、余計な心配を掛けてしまったと思つて苦笑いしながら笑つて見せた。しかし、それこそ余計な心配のようで、凜花はニコリと笑つと「そうか・・・」とだけ言つて御飯に戻った。

「高麗ちゃん高麗ちゃん。」
高麗の隣で一緒に御飯を食べていた風が、高麗を小声で呼んだ。それに答えて振り向いた高麗は、この事が原因で風の事を好きになつ

てしまう。

「はいっ。高麗ちゃん。あ〜ん。」

高麗が風に振り向くと、風は皿に載っていた最後の一つを高麗に食べさせようと持って来ていた。それがとても嬉しかった事と、風の笑顔にときめいた高麗は喜んで自分から突撃して勢いよくそれを食べた。とても満足そうな笑顔を浮かべて二人で笑い合っていた。そんな微笑ましい光景を見た魔可は、風への心配がはち切れたかのようにととても良い笑顔で笑うと、今度は魔可が風を真似るようにして風に揚げ物を食べさせてあげていた。そんなこんなで時間は過ぎていく。一度過ぎた時間は戻ってこない。それは、どんな状況においても同じであった。

第求の武 周輪、孫策と義姉妹の契りを結ぶ

高麗が、此処へと案内して風を治療して更には夕食も御馳走になった凜花達。そんな凜花達はいま、就寝の準備に入っていた。その中でも一番張り切っているのは魔可だった。どうやら風を守りたいと強く願っているようで、風の身の回りの準備を率先してしていた。その傍では高麗が少し拗ねたような顔をして布団に入っていた。どうやら高麗の就寝時間は若干早いらしい。あつという間に眠りについてしまっていた。

「さあ、私たちも眠りましょう？」

全員の就寝準備が終わったのを確認した美鈴は、凜花達に眠るよう伝えると自分も布団に入って目を閉じた。しかし、そのまま美鈴がぐっすりと眠ることは無かった。暫くしても目が冴えているのか、どうにも寝付けない。困った美鈴は他の皆を起こさない様にゆっくりと起き上がった。そこには、同じようなタイミングで起きて来た凜花も一緒に居た。少し風に当たりたかった美鈴と凜花は、身振りでお互いに外に出るように指示してお互い同時のタイミングで外へと出た。外は月明かりが綺麗に全体を妖しく照らし出していて、景色も呼応するかのようにその色を妖しく輝かせていた。

「もしかして、美鈴も眠れないの？」

外へ飛び出して、庭をウロウロしていた凜花達はそのまま散歩の形になって来ていた。そんな時に不意に凜花が美鈴に聞いた。美鈴もと言う所を聞くと凜花もなかなか眠りに着けないらしい。暫くしてから返事をした美鈴は、その後少し考え込んでしまった。

「しかし、私たちも色々経験してしまったな。そちらでは姉妹の一人が旅に出て有名になった。こちらではそれを追いかける形で私

が旅に出た。すると私たちは出会って旅をする事に。これも運命なのかな・・・」
少し俯き気味になった美鈴は、そんな事を言いながら歩を進めていた。もうかなりの距離を歩いている。すると、唐突に凜花が口を開いた。何を言い出すのかと思つた美鈴だが、この後になつて美鈴は凜花の馬鹿と自分の幼さに心を痛める。

「此処まで来たらもう十分だよね？ねえ！美鈴？義兄弟の契りつて知ってる？」

唐突にその事を伝えた凜花は、美鈴に手を差し伸べた。これが所謂『義兄弟の契り』らしい。しかし、本当に唐突にそんな重大な事を伝えられた美鈴は少し戸惑つてしまつた。そして顔を赤らめてしまつた美鈴だが、その契りを良しとした美鈴が凜花の手を、指を絡ませながら握つた。そのまま二人で暫く動かなかつた二人だが、その状態は直ぐに解けた。

「これで私たちは義姉妹だ。今までありがとう美鈴。そして、これからも宜しく美鈴。」
目を閉じてお礼を言つた凜花は、晴れて美鈴との義兄弟の契りを終えた。

「美鈴、ちよつとだけ目、閉じてて？」
美鈴にそう告げた凜花は、美鈴が目を閉じるのを待つていた。疑問を抱く心から少し不安になりながらも、美鈴は目を閉じた。暫くこの状態が続いたが、その状況を凜花は打ち破つた。美鈴の頬に、軽くキスをしてあげたのだ。そして凜花が目を開けるように言つと、すぐさま美鈴が目を開いた。その顔は真っ赤になっている。喜びも恥ずかしさも、それに感動も含められた表情だ。そして凜花に抱きついた美鈴は、喜びのあまりに涙を流していた。

「ええ・・・と。私たちはこれからも一緒だよ？だからさ、私が美鈴の力になる。だから美鈴も私の知恵になって？」

いきなり美鈴に抱きつかれた凜花は、少し戸惑ったが直ぐに立て直した。そして美鈴ともう一つの約束をした凜花と美鈴は、庭を散歩するのを止めて寢室の前へ戻ると、少しの間縁側に座って二人で話を始めてしまった。しばらく話は続いたが、気が付いた頃には美鈴も凜花も肩を並べて眠ってしまった。そしてその二人を、大分時間がたつてから起きて来た高麗が見つけることとなる。その時の二人の寝顔は、幸せそうな夢を見ている表情だった。そして、無情にも時間は過ぎて朝がやって来る事になる。

第拾の武 孫堅、黄祖を見破る

凜花達が一生懸命お話を渡り歩いていてる所に悪いが、もうそろそろ話は元に戻る。所変わって、華恋と炎璃のお話になる。

「・・・華恋？どこまで行けばいいのだ？」

只今二人は、昼間だと言うのに薄暗い森林の中を道を頼りに何処までも歩いてきた。もう数えられないほどの歩数の間、ずっと歩き詰めている。此処まで来ると誰かとすれ違いそうなものを、華恋と炎璃はこの森に入ってから一人の人ともすれ違ったりなどしていなかった。

「・・・ハア・・・ハア・・・私も滅入るわ・・・」

流石に体力の限界を感じて来た華恋だが、彼女には少し違和感が感じられた。最初はほんのわずかな量だけだったが、今となっては夥しい数の殺気や妖気に包まれている。その事を知らない炎璃はどうしようもなく華恋の後ろを付いて来ている。すると、真上から何かが落とされるような風邪を切る音が聞こえた。音の方向的には華恋の真上だ。それを間一髪交わした華恋はその落下物を見てゾッとした。

「！？毒ナイフ？・・・誰？そこに居るのは。」

華恋がギリギリかわした物の正体は、刃先の部分に毒を塗ってある小さなナイフだった。それを見た華恋が上を仰ぎ見た。しかし、見えるのは何処までも黒く見えそうな木ばかりだった。しかし、華恋は上を仰ぎ見て初めて違和感に気が付いた。そして、落ちて来たナイフを引き抜くと、誰も居ないような場所へそれを投げた。

「！？キャツ・・・！貴様、何故私の姿が・・・」

華恋がナイフを投げると、その先では一人の少女が腕を庇って立っていた。どうやら華恋が投げたナイフを腕に掠めたらしい。余程の即効性の毒のようで、少女の足は既に震えていた。これが恐怖による物なのか毒による物なのかは華恋には分からなかったが、ナイフを投げたのがこの少女である事は間違いなかった。腰には同じようなナイフが数本ぶら下がっていた。

「そんなの簡単よ？アナタにこれを当てたい。そう願ったから当たったの。ねえ？炎璃？」

少女を鼻で笑って見せて炎璃を呼んだ華恋だが、当の炎璃はと言うと幻術を見破るところか未だに周りをキョロキョロしていた。因みに幻術は少女の腕がナイフで切られた拍子に解けており、普通の森の様子へと変わっていた。もう空は先程までの様な暗さは無い。日の光が差し込んで、少女の姿も良く見えている。まだ華恋の妹、魔可となんら変わらない背丈の少女は足を震わせて華恋を見つめ、そして恐怖からなのか足から力が抜けてその場へ座り込んでしまった。

「やれやれ・・・ほら。貴女の名前は？」

ヘタリとその場に座り込んでしまった少女を見かねた華恋は、その少女を起こそうと手を伸ばした。その手を掴んだ少女は、ニヤリと笑って地面に落ちていた木の枝を踏み折った。すると、それが合図だったかのように様々な方向から矢が飛んできた。それは、華恋を吹き飛ばしそうなほどに威力を持っていた。

「ハハハあ！こ・・・この黄祖の手に掛かれば、兵一万に相当すると言われる孫堅だろうがひとたまりも・・・」

華恋が矢を受け、仰け反ると先程までの態度とは一変した少女が自分を黄祖と名乗り出て胸を張って自画自賛を始めた。相当このトラップに自信があったらしい。その背後では炎璃がアタフタして華恋を見ていた。

「やれやれだな。アンタ・・・友達居ないだろ？」

その口調に、炎璃は驚いた。多少は大雑把な所は有れど、口調は女性らしくった華恋の口調がここでは何故か男の物言いだった。しかも、目つきもいつもの様に丸目な可愛らしさなど見られない吊り目になっている。そして華恋の状況はと言うと、飛んできた矢全てを手で受け止めていた。しかもその内の一本は口で受け止めている。

「あ・・・あ・・・わ・・・私・・・あ・・・貴女の弟子にしてもらいたい・・・」

華恋の威圧に屈してしまった黄祖は、その場で足を再び竦ませてペタンと座り込み、黙り込むと思いきやいきなり手を合わせて拝むかのように華恋を見上げると、弟子にして欲しいと言って来た。

「・・・失せる・・・」

もう黄祖の姿を見るのも嫌になった華恋は、黄祖の耳元でボソリと呟いた。そして、まるで盗賊が逃げ出すかのように急いで逃げ出した黄祖は、そのまま何処かへ姿を消して行った。その間「次は覚えていろよ!？」と、まるでやられ役の悪役の様なセリフを吐いて逃げに行った。そして二人になった華恋と炎璃は、そのまま森を抜ける為に一本道を進んでいった。

第拾壹の武 孫堅、自分の強さを知る

森で立ち往生を喰らってしまった華恋たちは、少し歩くペースを上げて森を突き進んだ。そのお陰で直ぐに森を抜ける事が出来た。出口からは、大きな街が一望できる丘になっていた。そしてその坂を下りた華恋と炎璃は、周りの盛況ぶりに驚いていた。

「ふわあ・・・大きな街なのねえ・・・」

「ああ・・・相当に栄えているんだなあ・・・」

周りをキョロキョロしながら進んでいた華恋達は、少しの間はこの街の広さに口が開きつ放しになっていた。それも二人同時に開いて二人同時に閉じていたのだ。

「あなた！旅の人かい？」

「えっ？はあ・・・そうだけど？」

華恋が人数の多さに驚いていると、後ろから声を掛けられた。どうやら行商人の女性らしい。活発そうな物言いは、商いをして生きている女性であると主張しているようだった。その女性は、背中に背負っている大きな藁で出来たりユックサクを降ろすと、その場の中から水筒を取り出して豪快に飲みだした。

「んくつ・・・んくつ・・・プハア！生き返るう！」

一気に飲んで直ぐに空になった水筒を強く握った女性は、とても嬉しそうにニコツと笑っていた。そして華恋たちにも飲むように勧めて来たが、華恋たちは断った。ここまで飲み物を嬉しそうに飲み干す人なんてそうはいない。そんな人から飲み物を貰うのは、幸せを無理矢理奪う事になると思ったのだ。

「フウ・・・そうだ！私の名前は許緒。これからここら辺の領主で

ある曹操殿のお城に向かう所なの。君たちも一緒に来ないか？たぶん君たちの事を快く迎えてくれる筈だからさ？ね？」

許緒は、水筒を鞆のポケットに直すとそのまま曹操の屋敷に案内してくれると言いだした。よっぽどの知り合いなのだろうが許緒が城を所有している訳ではない。少し戸惑った華恋だが、炎璃はあつさりとしてそれを承諾して、もう既に付いて行く気満々だった。少しため息を突いて考えた華恋だったが、自ずと答えは絞られていった。

「しょうがない。私も付いて行くわ。案内してくれる？」

「合点招致」と言つて許緒は華恋と炎璃を曹操の屋敷へと案内してくれた。その屋敷は意外と街の入り口の近くにあつて、入り口も相当地に大きなものだった。そこで許緒は荷物を肩から降ろして門で待ち構えていた二人の門番と話をしている。どうやらいつも此処には来ているようだ。門番の表情が綻んでいる。仕方ないだろうなと華恋も思う。どうみても許緒の体は華恋よりも年下だ。しかし、許緒が教えてくれた年齢は、華恋よりも二つ上。即ち20歳だった。それでも許緒は子供じみていると炎璃も感じている。

「さっ！通してくれるってさ！いつ？」

門番達に信頼されているのか、許緒はなんら問答になる事も無く許可を貰つてくれた。そして華恋達は曹操の屋敷へと上がった。その中身は実に綺麗に掃除されていて、壁が光つて見えるほどだ。以前お邪魔になつた劉表の屋敷よりも何段階か飛び越して大きな屋敷、そして劉表の屋敷よりも何倍も清潔感あふれる邸内。決して劉表の屋敷が廃れている訳じゃない。だが、これは一流も一流の掃除屋が掃除しているのだろう。とにかく、埃一つ落ちていなさそうだった。

「そうそうさま？入るよお？」

許緒が曹操の居る玉座の間とも言えそうな程に飾り付けられた部屋の扉を叩いて開いた。その部屋は本当に何処までも続いており、そ

の奥には一人の少女と二人の側近と思われる付き人がいた。それにしても曹操と言う人物を、煩そうなおツサンだと思っていた華恋はびっくり。実物はまだ風とそこまで変わらなそうな小さな少女だった。その隣にいる二人は華恋と同じ位なのだが、曹操はとても大人とは言えない。寧ろ子供にしか見えなかった。

「・・・可愛い子供・・・」

「そこっ！聞こえているぞ！誰が子供か！誰が！」

炎璃が、聞こえない様にボソリと呟いたが、それが聞こえていた曹操は、自分を子供扱いされた事に關してまるで猿の様にジタバタして怒っていた。椅子を飛び出して炎璃を殴りに行きそうな勢이었다ので、右側に居た側近が（逆隣りの側近に惇ネエと呼ばれていた。）曹操の動きを止めた。

「こ、こら！来夢ライム！離しなさいよ！放せたら！13歳のくせにお姉ちゃんぶるなあ！」

「まったく、妖真ヨウマはいつもこれだ。眠兔！コイ・・・姫様を持っていてくれ！」

「惇ネエ。それより今は客人が・・・」

「おい、眠兔？いつから私を名前で呼ぶほど余所余所しくなったんだ？」

「・・・ごめん・・・来夢・・・」

華恋達を放つて行くかのように、向こう側でゴタゴタが起こった。現在は、両腕を眠兔と呼ばれた側近に縛られてブランとぶら下がっている妖真と呼ばれた曹操。それを持ってしよんぼりと俯いているのは、眠兔と呼ばれた・・・服の刺繍の通りだと夏侯淵。その二人を叱っている来夢と呼ばれた・・・チラリと見えたパンツにデカデカと書かれている刺繍の通りだと夏侯惇。

「いつもこんな調子なの・・・？」

「まあ・・・可愛いから良いんじゃないかな？」
コソコソと許緒に聞いた華恋だが、許緒は普通な受け答えだけすると曹操の暴れっぷりを見て胸を張って笑っていた。どうやらいつもの事らしい。後ろでは少し怯えた様子を見せていた炎璃が、妖真の所へ行つて頭を下げて謝っていた。そして少しして、椅子を用意された華恋達は、そこに腰かけて最後に妖真が腰掛けると同時に話は妖真の口から始まった。

「早速だけど・・・孫堅殿？アナタは、『一人で近衛兵1万人に相当する力量の持ち主だ』と聞いたのですけれど。本当なのかしら？」
華恋には、この質問に意味を分かりかねていた。以前にも黄祖にそんな事を言われていたが、華恋にはそんな実感など無かった。特にこれと言つて目的も無いまま旅を続けていたのだ。それ故に、手に入れる事の出来る情報は限られていた。

「私は、そのアナタの力を買って、私のきゃきゅしよ・・・噛んだ。」
客将を上手く言えなかったのか、妖真は舌を出してヒリヒリする部分を風に当てて痛みを和らげようとしていた。その仕草はとっても可愛い物だ。炎璃はその妖真の姿を見て目を輝かせている。このロリコンが、暫くして、痛みが引いたのか妖真は1から説明し直してくれた。要約すると、華恋をスカウトしたいようだ。そして華恋は初めて自分の強さに気が付いた。多少は強いとは思っていた。下賤な奴らを吹き飛ばすなんてのは序の口だろう。しかし、それは比較的皆出来る事だ。しかし華恋は周りと比べて何倍も強いらしい。それを買った曹操が、今こうして華恋をスカウト、基口説いているのだった。

「そちらとしても悪い話ではない筈だ。そしてアナタには最高の・・・」

妖真が説明を含めつつも華恋を説得しようとしていたが、華恋はその言葉の途中で机を叩いて大きな音を立てた。

次回に続く

第拾壹の武 孫堅、自分の強さを知る（後書き）

今回は唐突に更新&いろいろと魏軍の武将が出てきました。

本音：魏軍の武将はキライ。呉軍の武将が好きです！

次に続く！

べ、別にめんどくさいとかそういう訳じゃないんだからね？

第拾弐の武 孫堅&曹操、交渉決裂そして和解（前書き）

前回の続きですが、多少の誤差が出る予感

第拾式の武 孫堅&曹操、交渉決裂そして和解

「私は、戦は大嫌いです！」

妖真が、自分の屋敷の中で華恋をスカウトしていたその時、華恋の大きな声が響いた。机を叩いていた事もあつてなのか迫力が数倍に跳ね上がっている。

「な、なんでなのかしら？アナタに悪い条件なんて一つも無いのに、

」

「私は、人を傷つけるのが大嫌いなんですっ！」

少々華恋の覇気に押され気味だった妖真だが、何とか持ち直して再びスカウトに入った。しかし、今回も結果は同じだった。華恋は断固としてその勧誘を頑なにまで断って見せた。

「どうして?!私はどうしてアナタを歓迎しようとする」

「・・・いい加減にしてもらえないかしら？私は私の生き方があるの。」

」

尚も諦めず(というか、此処まで来て妖真自身引き返せないでいた。)華恋を説得しようとした妖真だったが、ついに華恋も怒りが臨界に達しようとしていたらしく、顔を俯かせて上目遣いで妖真を睨みつけるとボソリと呟くように心の滞りの一部を吐きだした。その殺気云々を感じ取った妖真達はそれぞれに身構えていた。来夢と眠兎は妖真のすぐ傍に居たので、腕を伸ばして守ろうと、妖真はそれに答える形で腕組みをして立ちあがっていた。それに合わせて炎璃も立ち上がりそうになっていたが、華恋に睨まれた所為で竦んで立ち上がれなかった。許緒はと言うといつの間にもやら帰っていた。

「・・・それで？私にはどんな得が有り、そしてどれだけの損が在るのかしら？」

声の調子が少しいつもらしく戻って来た華恋は、少し深呼吸をして心を落ち着かせると足元の椅子に腰かけて大人しく座った。それに安心をおぼえた炎璃は、今まで華恋の覇気で息が出来ていなかった事に気が付いて深呼吸をしていた。

「・・・えっ？そ、そうね。アナタみたいな強い豪傑は、属しているだけでかなりの声明を得られそうね。」

「だから？私を戦争の武器にしようと言う事？それなら私はお断り。」

「貴様に決定権が在るかな・・・？」

「さあ、どうかしら？試してみても良いけど？従姉妹思いのおチビちゃん？」

最初は、華恋の覇気に気圧されて言葉が詰まっていた妖真。しかし、直ぐに平静を取り戻した妖真はまたもや長つたらしい説明に入ろうとしていた。そして、区切りの良い所で華恋が自己解釈で話を探ってみた。すると、言葉を言いきらない内に来夢が華恋の首筋にナイフを突き立てていた。幸い、残り数？ほどの差が開いている為斬れたりすることは無かったが、いつ殺されても可笑しくない殺気が部屋の中に充満していた。暫く空気が変わる事は無かったが、妖真が来夢を退かせる事を命じ、殆んど同時に炎璃が華恋に謎の告白をして意気消沈させていた。

「・・・プツ・・・アハハハッ！何言ってるのよ！炎璃は私の事嫌いになっちゃったの？」

「・・・えっ？」

炎璃から受けた謎の告白を聞いて、華恋は思わず吹き出してしまった。（告白の内容がどんな物なのか。それは貴方達の思考の中に存在する。）初めは華恋が吹き出した事が分からなかった炎璃は、間抜けな声を出してしまった。しかし、周りに居た妖真を始め、来夢や眠兎も笑い声を上げていた。そこまで来て自分のした事の恥ずか

しさを実感した炎璃は、顔を真っ赤に染め上げて恥ずかしくなってしまうた。

「アハハハツ・・・分かったわ。貴方の意見を尊重しましょう。戻る途中で捕縛する様な汚い手は一切使用しないと誓うわ。安心して帰路に付きなさい。いつでも遊びに来てくれると嬉しいわ」
最後まで笑っていた妖真が、目尻にうつすらと涙を浮かべながら笑いを止めると、華恋の意見を承諾してくれた。そして、やっとスカウト基勧誘のお時間がお開きとなったのである。屋敷の門が開け放たれて華恋と炎璃はそれぞれお土産の品を数種類渡されて、城主の見送り付きで街を後にした。

第拾参の武 孫権、周泰に命を救われる

朝日が昇って森を力強く照らし始めた頃の事、先日と同様に高麗の館に留まらせてもらった凛花達は風の容態を見守る最中にいた。そんな時、ふと魔可が屋敷を出て「山菜を積んでくる」と言っただけで山中を駆け巡っていた。

「いやあ こんなに材料が豊富な山なんて、他に見た事無いよお風も喜んでくれるかな・・・」

山の中腹辺りをウロウロとしていた魔可は、時折木の足元などにしやがみ込んでキノコや薬草や山菜なんかを取って行っていた。因みに小さかったり未成長の植物はちゃんと引っこ抜かない様にしていった。そして、それほど時間も掛からない内に背中の籠の中は山の幸で一杯だった。

「さあて、と。重くなってきたしそろそろ帰ろうか・・・な・・・」

「グルルルウ」

背中に背負った籠が満杯になってしまいこれ以上入り切らないと判断した魔可は、一息吐きながら後ろを振り返って帰路に着こうとした。しかし、振り向くとそこにはこの辺りには済んでいない筈のトラが腹を空かせているのか涎を垂らしながら魔可の方を睨みながら唸っていた。爪をとがらせて露出させていることからも狩猟対象が目の前に居る事は確実だ。トラの側からすれば「カモがネギ背負って自分の家の鍋に飛び込んできた」位のものだろう。

「・・・い・・・や・・・」

「・・・グガアアア」

目の前に巨大な肉食獣がいる事に対して恐怖を示した魔可は、恐怖から足が竦んでしまっていた。そして唯一動く首でゆっくりと涙を

流しながらトラを否定した。しかし、その願いは届かずトラは一拍置いてから魔可に飛びかかった。

「あああああっ！」

「グルルル・・・」

魔可に飛び掛かったトラは、まるで中に入っているのではないかと思うほどに執拗に自分の体重を少しづつ魔可の腕に乗せていった。そして、重さが増す度に腕が悲鳴を上げていた魔可は痛みから叫ぶことしか出来なかった。

「やめて・・・こないで・・・(フツ・・・)」

「グルルウ・・・(バタンッ)」

流石に腕の痛みには耐えられなくなってきた魔可は、痛みあまりに意識が吹き飛びそうになっていた。しかし、トラが口を大きく開けて来たのを見た魔可は、薄れ行く意識の中で掠れた声でトラを否定した。そして意識を失った魔可を見たトラは、相手を完全に追いつめた満足そうな顔を見ると、大きく口を開けて魔可の首から食べに行きそうな勢いで迫ろうとした。しかし、トラは魔可を喰らう事無く首が弾け飛んでいた。

「成敗・・・大丈夫・・・か・・・可愛い・・・いかんいかん・・・」

トラの首を撥ね落とした女性は、腰に提げている鞘へと血鎊を払い落して刀を仕舞い込んだ。トラに気配を探られないほどの隠密技術は、彼女の生きる糧となっている。そして、トラに襲われていた魔可の安否を確認しようとした女性は魔可の気絶している顔を見て可愛いと思ってしまった。しかし直ぐに立て直して魔可を御姫様だっこすると、山の木を伝って自分の隠れ家まで運んだ。その作りは質素ながらも頑丈で、壁には何箇所かに小さな布が巻いてある。材質は木や竹を使っているようだがどうすれば此処まで強固に作れるか

が分からなかった。それに結構な広さを誇っていた。

「とりあえずはこれでよし・っつと。」

いつもは自分の使っている布団に魔可を寝かせた女性は、魔可に絞った布巾を乗せると自分の身の回りの整理に取り掛かった。まずは色々と切れたり劣化したりしている部分の修復。これには摩擦だけで十分だった。それから御飯の用意。これもいつも一人でしている所為か素早く終わる事が出来た。

「うう・・・うん・・・」

「おっ？起きたか。大丈夫か？」

暫くは何もせずに魔可の傍にジツと座っていた女性は、魔可が起きるのを見るととても嬉しそうな表情になっていた。魔可はと言うと起きた直後に腕に激痛が走ってまた意識が遠のく感覚に苛まれた。しかし、魔可の隣にいた女性は、魔可の手を握って必死になって祈っていた。その願いが通じたのか、魔可は気絶する一歩手前の様な状況からなんとか立ち直した。そして大きく深呼吸した魔可は少しのあいだリラックスすると、今更にも謎がとても多い事に気がついた。

「ええ・・・っつと。貴方は一体・・・」

「あぁつと！私は周泰、字は幼平。君は？」

「わ、私は孫権、字は仲謀。えつと、周泰さん。助けに来てありがとうございます。」

戸惑いが消え去らないままにお互いの自己紹介をした二人だが、そこから先は何も話せずにただただ沈黙が流れていた。しかし、沈黙は意外な騒音で破られる。茶でも沸かしていたのか、部屋の奥の方から微かに湯が沸騰する音が聞こえた。するとそれを聞いた周泰は立ち上がると、それを止めて何かを持って来た。

「お茶・・・なんだけど、自信無いからお茶って呼べるかどうか・・・」
「いただきます！・・・ンクツ・・・ゴクツ・・・プハア！・・・美味しいですよ。凄く。」
周泰が持つて来た物は、今で言う烏龍茶にも似た色合いの茶色いお茶だった。持つて来た時に周泰は、恥ずかしそうに自信の無さを伝えたがそれを聞く間もないうちに魔可は茶碗を取って飲み干した。その味は、家庭的で温かい味だと魔可は心の中で呟いていた。家を飛び出して姉妹たちと共に旅に出た魔可に取って、その味は何とも感動させられる味だった。

「もう、何だか私たち・・・運命の相手だったりするんじゃないですかね。」

「えっ？」
「だってそうじゃないですか。貴女は、死にそうだった私を助けてくれたし、私は貴女の趣味にピッタリと合う趣味だろうし。これって本当に・・・」

唐突に、茶碗を置いた魔可は摩訶不思議な事を言いだした。その言葉にドキッと来たのは、言った本人よりも周泰の方だっただろう。なにせ、顔が見て分かるまでに紅潮しているのだから。それは魔可にしてみても同じだったのだが、なんとも言えない空気の中に二人がいると言う事だけは誰にも分かった。周泰が、腑抜けたような返事を返してしまいが、それを聞いていなかったのか魔可は遮るように説明してくれた。最後に少し言葉が掠れていたが、その点を除けば魔可の説得術はそれなりの線を行っているかもしれない。

「だから・・・真名を・・・教え合いませんか？」

「！！いいとも！私の真名は艶魔。艶やかなの艶に魔王の魔だ。」

「・・・！ 私は魔可。魔女の魔に possible の可。これから宜しくね。艶魔ちゃん。」

顔を赤くして途中の所を言えずに最後まで来た魔可は、最後に友好を深めようと真名の交換を求めた。実は苦し紛れの策だった魔可だが、周泰はそれを寧ろ喜ばしく思っただけで魔可の手を握ると、とても良い笑顔を作って魔可に微笑んだ。

「わ、私は君と・・・」

「それじゃ、私は体も良くなつたし帰りますね。また会いましょう。」

「えっ・・・ちよっ・・・待って！」

真名を教え合い、友好が深まった艶魔と魔可。艶魔は何かを言いだそうと口を開いたが、魔可は遮るかのように自分も喋り出した。そして、言葉が終わるころには帰る身支度を済ませて部屋から立ち去ろうとしていた。その事に驚きを感じずにいられなかつた艶魔は、少しの間舌を噛んだように言葉が出てこなかつた。だが、次の瞬間には魔可を足止めさせるだけの言葉が飛び出していた。

「わ・・・私は見ての通り一人暮らしなんだ。それで、よければその・・・そちらの家族と・・・」

「家族・・・姉が二人と妹が一人。それで旅してる。」

「それじゃあ！私も旅に加えて頂きたい。」

少し緊張気味に言葉が出難くなっていた艶魔だったが、なんとか勇気を出して言葉を伝える事が出来た。その言葉に、魔可は自分の素姓の事をまずは教えた。すると艶魔は、目を輝かせて魔可の手を握んだ。そして、仲間に入れて欲しいと頼み込んだ。流石の魔可も、命の恩人の頼みを断るほどナンセンスでは無い。しかし、魔可にはどうしても艶魔側の気持ちを尊重したいと思う気持ちがあった。

「でも・・・それで艶魔は・・・」

「私はそれでも貴女に・・・いや、魔可に付いて行きた・・・キャッ！」

「えっ？・・・ムグッ・・・」

どうにも自分から艶魔を連れ出そうと言う気になれないでいた魔可だったが、自分の事を思ってくれている事を嬉しく思った艶魔は、尚更魔可と一緒に外に出たいと思うようになり魔可の肩を掴んでまで付いて行こうとした。しかし、魔可の肩を掴もうと一歩前に出た時に足元に落ちていた雑巾を踏んでしまった。そしてそのまま前に倒れそうになった艶魔は魔可の顔面に激突・とは行かなかったが、ハプニングからお互いの唇が濃密にくっ付いていた。

「あわわわわわわわ．．．」

「え．．．えつと．．．艶魔．．．？ど、どうしてこんな．．．？」

慌ててお互いの口を離れた二人は、それぞれ顔を真っ赤にして視線を逸らせた。そして、艶魔は自分の口を押さえて慌てふためいていた。その声を聞いた魔可も、半乱れ気味になりながらも視線を合わせないまま艶魔を呼んでいた。

「．．．ふう。とりあえず落ち着いたし、行こう？」

「えっ？行くつて．．．」

「決まってるじゃない 私たち孫姉妹の所よ。ようこそ、艶魔ちゃん。」

「．．．！！はいっ」

暫く間を置いて、だいぶ心が落ち着いた魔可は背中に当たっていた扉を開いて艶魔に手を差し伸べた。トラブルでキスをしてしまった艶魔はもう終わったと思っていたのだ。それ故、素っ頓狂な声を出してしまった。しかし、それを魔可は気にしておらず歓迎してくれた。その言葉を聞いて恥ずかしさ諸々が弾け飛んだ艶魔は、今までろくに使わずにいたこの小屋に別れを告げて魔可と共に凜花達の待つ所へと向かった。その時の二人の表情は、とても明るかったと言

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8947m/>

三国艶武～乙女乱舞伝～

2011年10月7日02時14分発行